令和３年度　学校評価自己評価表　　狛江市立狛江第四中学校

学校教育目標

１　自立　「すすんで学び、考える力をつけよう」（主体的態度・思考力、問題発見・解決能力）
２　連帯　「力を合わせて、みんなのためにつくそう」（人間関係形成能力）
３　健全　「規律を重んじ、心身をきたえよう」（自己実現力、実践力）

目指す生徒像

「自分を信じ、仲間を信じ、互いを認め合いながら成長する生徒」

○自ら学び考え、主体的に物事に取り組む生徒
○互いの存在を認め合い、互いに協働し高め合う生徒
○自らを律し、心身共に健康で、夢や目標の実現に向けて前向きに実践する生徒

目指す学校像

「生徒一人ひとりが目を輝かせ、何事に対しても前向きに活動できる学校」

○落ち着いた学習環境の下、生徒たちが意欲と関心をもって「自主的・自発的」に取り組むことのできる授業が展開され、確かな学力が確実に身に付く学校
○生徒たちが主体となり、生き生きと活動できる学校行事・生徒会活動・部活動を通して、豊かな心と健やかな体を育む学校
○３年間の進路学習が計画的に展開され、生徒一人ひとりの進路希望を実現する学校

△：＋３ポイント、▼：－３ポイント

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	取組指標 評価	取組指標 対象	成果指標 評価	成果指標 対象	分析・コメント(R2)	改善策　※学校評価委員より
確かな学力の向上	基礎・基本の確実な習得と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力、人間性等の涵養をバランスよく実現する。	適切に教育課程の管理を行う。	年間指導計画に基づき授業時数の管理を適切に行う。	4	教員	＊	＊	教員　100%(100%) 授業実施率：１年＝107.7%、２年＝106.7%、３年＝103.5%	担当者の適切な進行管理等により授業内容については予定の内容をすべて終了することができた。時間割の変更については2週間前までに確定できるよう学年及び教科担当者間で調整を図りながら共通理解の下で適時・適切に行っていく。
			週案簿に基づき先を見通した計画を立て、バランスの良い指導を行う。	4	教員	＊	＊	教員　100%（－）：週案簿の活用は定着している。	引き続き毎週金曜日の提出の際に確認し、週案簿の有効活用を促進していく。
			指導と評価の一体化を図る評価計画を作成し、３観点についての適切な評価規準に基づいた評価・評定を行う。	4	教員	＊	＊	教員　100%（－）：新たな評価の３観点について研修を深めたことで理論的な理解を深めるとともに、各教科の実践についても共有化することができた。	各教科の評価については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理・統合されたことを受けて実践した組織的な調査・研究をふまえ、より公平・公正な評価・評定を実践する。特に、第3観点の「主体的に学習に取り組む態度」の見取り方や適切な評価材料の設定の仕方等についてさらに研究を進めるとともに、「指導と評価の一体化」に向けた授業改善を進める。
		「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。	教材研究や指導方法等の工夫により、生徒が「分かりやすい」と実感できる授業実践を行う。	4	教員	4	生徒・保護者	生徒　93%（88%）△ 保護者　90%（84.7%）△ 教員　100%（100%）：総論としては授業改善に向けた取組に対して肯定的に受け止めてもらっている	すべての教科において「育成したい力」を明確にした授業改善に組織的に取り組むことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。 ※教材の工夫、指導法の見直し、そして改善は教育界では必要不可欠でしょう。
			定期テストや各種学力調査、生徒による授業アンケート等の結果を参考にした授業改善プランを作成し、授業改善に取り組んでいる。	4	教員	2	生徒	生徒　79%（－） 教員　93%（100%）　▼：取組指標に対して成果指標が低いことから授業アンケートの内容及び活用方法に課題がある	授業アンケートの実施目的や内容等について見直す必要がある。 ※アンケートの意味、結果の価値づけが必要ではないか、生徒への情報発信をさらに行うとよい。
			授業のねらいと展開を明示し、生徒に課題意識をもたせ、見通しをもって粘り強く学習に向かうことができる授業を行う。*「主体的な学び」*	4	教員	4	生徒	生徒　90%（－） 教員　100%（－） 「主体的な学び」に向けた取組の成果が上がっている。	すべての教科において、「育成したい力」を明確にした授業のねらいと展開を提示することで、生徒に課題意識をもたせ、自分の考えをもち、見通しをもって粘り強く学習に取り組む意欲を高めさせる（主体的な学び）とともに、授業内容や単元に応じて、発表や討論等の他者と交流する学習活動を通して自分の考えを広げ深める（対話的な学び）ことができる生徒を育成する。そして、授業の終末においては、まとめ・振り返りの時間を確保し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて学んだ知識を整理し、より深く理解して自分自身の次の課題を見つけさせる（深い学び）授業を展開し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。 ※生徒や学校の取組をアピールする機会を増やすとよい。 ※話し合いやグループ活動が得意な生徒とそうでない生徒、他人の意見に流されやすい生徒等もいると思います。
			生徒同士の協働や教職員・地域の人との対話等の他者と交流する学習を通して自分の考えを広げ深めさせる授業を行う。*「対話的な学び」*	3	教員	3	生徒	生徒　87%（－） 教員　87%（－） グループワークについては感染防止策を講じながら各教科で工夫して行っている。	
			授業の終末に、まとめ・振り返りの時間を確保し、各教科等の「見方・考え方」を働かせて、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見出して解決策を考えたりすること等に向かう授業を行う。*「深い学び」*	3	教員	3	生徒	生徒　89%（－） 教員　87%（－） ３つの学びの内でもっとも難しい学びであるが、各教科で様々な取組を試行錯誤している様子がうかがえる。	
		少人数制授業により個に応じた指導を充実させる。	数学・英語では「東京方式習熟度別指導ガイドライン」に沿い、個に応じた指導の充実を図り、学力の向上を推進する。	＊	教員	4・3	生徒・保護者	生徒　91%（80%）△ 保護者　85%（82%）△ 一定の成果が現れており、保護者の期待も大きい。	引き続き「東京方式習熟度別指導ガイドライン」に沿って、より一層の個に応じた指導の充実を図る。数学ではつまずきやすい内容の習得を目指した繰り返し学習を行い基礎・基本の確実な定着を図るとともに、発展クラスでは狛江市の発展教材等を活用し学習意欲を高める。英語科では計画的に都英語教材「Welcome to Tokyo」に取り組むとともに、令和4年度実施予定の「中学校英語スピーキングテスト」に向けて、オンラインスピーキングトレーニングの計画的な実施や、「TOKYO GLOBAL GATEWAY」を訪問すること等の体験的な学習の場を利用するなどして「聞く」「話す」指導を重点的に行う。 ※今後もそれぞれの層に適した課題設定を行うことで個別最適化の授業を進めていただきたい。
		ICT機器を活用した教育活動を充実させる。	観察・実験、見学・調査・実習等、体験的な学習や問題解決的な学習の場面並びにリモート授業等で効果的にICT機器等を活用する。	2	教員	3・2	生徒・保護者	生徒　89%（－） 保護者　78%（－） 教員　73%（－）：タブレットPCを含めたICT機器の効果的な活用についてより一層の研究が必要である。	ICT機器については分かりやすい授業を実践するためのツールとしての利用だけでなく、個人・グループ学習においても、観察・実験、見学・調査・実習等、体験的な学習や問題解決的な学習の場面で積極的に活用する。 ※タブレット型端末機が余り活用されていないのは残念である。反転学習など家庭で使う機会を増やしてはどうか。　※このコロナ禍故に現代社会全体が教科されたと言っても過言ではないタブレット端末等のICT機器活用は、教育効果として相応しいアイテムとなっている反面、ともすれば社会生活で大切な協調性を疎かにしてしまう要素もあることを忘れてはならないと感じます。　※デジタルツールは使いこなせている生徒とそうでない生徒の差があると思う。
		家庭学習の習慣化を図る。	毎日１時間以上の家庭学習の習慣化に向けた取り組みを、授業や学年・学級の指導の中に位置づけて実践する。	2	教員	1	生徒	生徒　65%（57.3%）△ 保護者　61%（50.3%）△ 教員　73%（53%）　△：コロナ禍での家庭学習の重要度が高まってきている結果である。	学習の記録やシラバス、各種調査結果等を活用し、常に学習目標を意識して学ぶように指導するとともに、教育相談等を通して家庭への啓発をより一層、粘り強く行うことで家庭学習の定着を図る。その際、予習復習を含む自主的な学習に取り組めるよう、授業や学年、学級の指導の中に位置付けて習慣化を図る。また、タブレット端末を活用した家庭学習への支援において、生徒一人ひとりに応じた学習活動や学習課題を提供することで個に応じた指導を充実させ、個別最適な学びの実現を目指す。 ※家庭での学習方法が分からない生徒が多いのではないか。学力向上には欠かせない学習なので、タブレット型端末機の活用と合わせて、効果的な方法を模索してほしい。　※放課後はオンラインゲームやSNSに多くの時間を費やし、学習が疎かになっている生徒がいる。デジタルツールの誘惑と学習とのバランスが取れるように学校で導いてほしい。

豊かな人間性の育成		基本的生活習慣の定着を図る。	時間を守ることや身だしなみを整えること等、基本的な生活習慣の指導を行う。	4	教員	4	生徒	生徒　93%（ー） 保護者　89%（ー） 教員　100%（ー）：概ね基本的な生活習慣は身についているが、授業の開始終了時間についてはチャイム着席と関連した課題が見られる	引き続き全教育活動を通して、基本的生活習慣の定着を図るとともに、自立・連帯・健全の精神を養うための指導を意図的・計画的・継続的に行う。特に、生活指導に関する情報交換及び規範意識の確立を基軸とした共通理解及び共通実践の企画調整の場として「生活指導部会」を定例化し、生活指導上の諸問題の未然防止と組織的な対応に取り組む。 ※上履きをきちんと履いていないなどの身だしなみができていない子はいると思います。 ※学校では守れているのでしょうが学校外プライベートではルーズなところもあるので保護者の評価が少し低くなっていると考えます。
			教育活動全体を通して「挨拶」の定着を図る。	4	教員	4	生徒	生徒　94%（ー） 保護者　88%（ー） 教員　100%（ー）：生徒会を中心とした挨拶運動は実施できたが日常的な挨拶については改善の余地がある	日常的な挨拶を通して生徒と教員のコミュニケーションを大切にしながら、信頼関係の構築を図っていく。 ※小学生と一緒に校門に立った時は、あまり挨拶の声が聞こえず残念であった。保護者のポイント数の方が現実に近いのではないか ※校内ではあいさつが習慣化されているのに街で会うと多分恥ずかしいのだろう、あいさつしない生徒も少なくない。
豊かな人間性の育成	充実した特別活動を通して達成感や成就感を体感させ、自主性・協調性・責任感を育むとともに、思いやりの心や連帯感・自己有用感をもたせる。	行事や生徒会・委員会活動、部活動を通し、協調性を高め、充実感を体感させる。	生徒の積極的且つ意欲的な行事への取り組みを推進する。	4	教員	4	生徒	生徒　95%（85.3%）△ 保護者　94%（89%）△ 教員　100%（88%）△：コロナ禍の中で感染対策を講じながら実施方法等を工夫しながら実施してきた成果である	引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止策を適時・適切に講じた上で、すべての特別活動について行い方を工夫し、「できることを」「できる範囲で」「できる時に」実施していく。なお、修学旅行の行き先については令和4年度の実施結果を踏まえて改めて検討する。
			学年縦割りグループによる活動を重視し、学年を超えた幅広いコミュニケーション能力や上級生としてのリーダーシップや責任感の育成を図る。	4	教員	3	生徒	生徒　86%（63.7%）△ 保護者　83%（80%）△ 教員　100%（71%）△　非常事態に直面したことで学校全体の団結や絆が強まった成果である	学校行事をはじめとした諸活動において、学年学級縦割りグループによる活動を重視し、異年齢での望ましい活動を通して、学年を超えた幅広いコミュニケーション能力や上級生としてのリーダーシップや責任感を培う。 ※ここは四中が四中たる所以ともいえる項目です。四中のイメージは変わっていないと思います。
			生徒会や専門委員会、行事の委員、クラスの係活動等における積極的・自主的な取組を推進する。	4	教員	4	生徒	生徒　92%（75%）△ 保護者　85%（75%）△ 教員　100%（100%）　コロナ禍での不自由ゆえに仲間を求める姿、物事に自主的且つ前向きの取り組もうとする姿が随所に見られる	生徒会活動や学級活動等の活性化を図り、集団としての意見をまとめる話し合い活動等を通して、集団の一員としての自覚を育てて望ましい人間関係を構築させるとともに、主体的によりよい学校生活を築いていこうとする態度を育成する。 ※数値の変化は、この２年間でのコロナ禍から自然と影響されているのかもしれません。仲間を求める姿、物事に自主的に取り組む姿は、コロナ禍での不自由さから発生した現代社会が表す姿かもしれません。
			部活動を通して忍耐力や協調性、責任感を育てると共に、生徒同士の連帯感を深める活動を推進する。	3	教員	4	生徒	生徒　90%（86.7%）△ 保護者　89%（87%）△ 教員　86%（94%）▼ コロナ禍により様々な制限を受けての部活動であったがその中で生徒たちは意欲的に取り組んでくれた	生徒の特性を伸長するために多様な部活動を開設し、部活動を通して忍耐力や協調性、責任感を育て、健康で文化的な生活が送れるようにするとともに、異学年交流を図り生徒同士の連帯感を深める集団活動を通して生徒の自主性や社会性を身に付けさせ、豊かな人間性を育成する。 ※外部人材を活用しながら部活動の充実をこれからもお願いしたい。
		生徒一人ひとりを大切にするとともに、思いやりのある生徒を育成する。	日常の声かけや三者面談等を通して、一人ひとりの生徒理解に努める。	4	教員	4	生徒	生徒　93%（76.3%）△ 保護者　93%（84.3%）△ 教員　100%（ー） WEBQU等を活用しながら生徒理解に努めた成果が徐々に現れてきた	夏季休業中及び冬季休業前に教育相談（三者面談）を実施し、その中で生徒一人ひとりの学習の課題やWEBQUの結果を家庭とも共有することで、継続的な学習と学力の定着を推進するとともに精神面や生活面での安定を図る。また、自殺防止に係わる知識について共通理解を図り組織的に対応するとともに、東京都教育委員会作成のDVD等を活用した「様々な困難・ストレスの対処方法」「生命尊重」「援助希求行動（SOSの出し方）」等の学習を保健体育科や道徳等において、少なくとも1単位時間実施する。
			いじめ・不登校について、早期発見・早期対応に努めるとともに、家庭・地域及び関係機関等と緊密に連携して組織的に対応することで、生徒が安心して学校生活を過ごせるように努める。	4	教員	4	生徒	生徒　91%（97.3%）▼ 保護者　91%（99.3%）▼ 教員　100%（100%）生徒への質問を「いかなる理由があってもいじめは絶対にいけないという気持ちをもっている」から「先生方がいじめや不登校に対して適切に対応してくれているので安心して学校生活を過ごせることができている」に変えたことでいじめ・不登校への取組に対する成果を評価することができるようになった	いじめや不登校問題の未然防止や早期発見、早期対応のために、アンケート調査や個別相談等を通して生徒理解を深めるとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家を含んだ組織的な教育相談体制の充実を図り、悩みや心に問題をもつ生徒に対して積極的かつ組織的に関わる。特に、いじめ問題については、「四中いじめ防止基本方針」に基づいた教職員の組織的な取組に加え、WEBQUアンケート結果や「一行日記」の活用による生徒理解及び相談活動を意図的・計画的に行い、PDCAサイクルに基づいたいじめの未然防止及び早期解決に努める。また、生徒がいじめについて深く考え、いじめは絶対に許されないことを再認識できるようにするため、「考えよう！いじめ・SNS@TOKYO」等を活用して、学期の始めに「いじめに関する授業」を実施する。教室に入れない生徒に対しては、本人の希望に応じて授業の様子を別室でモニターできるようにする。また、不登校生徒に対してもタブレット端末を活用し、教員とのやり取りを通じて学びの保障を行う。 ※一度不登校になってしまうとなかなか復帰できない傾向は、小学校も同じである。関係諸機関とつなぎ、改善方法を模索してほしい。 ※決してあってはならない重要課題ですが、起きる前に何でも話せる人間関係づくりが必要条件です。教職員と生徒間の信頼関係をさらに深めていただきたいと望んでいます。　※放課後やオンラインでのやり取りなど、先生が把握しきれないこともあると思う。　※なかなか声を上げられない子、何かを抱えていても「隠すのが上手」な子を見つけて、なかなか表面には出てこない問題を見逃さないようにお願いします。　※いじめについては加害者側と被害者側の根本にある精神的、心理的、環境等をクリアにして正していかないとなくなっていかないと思います。
			校内委員会を中心に、個別指導計画に基づいた特別支援教育を推進する。	4	教員	*	*	教員　100%（ー） 特別支援教育コーディネータと養護教諭、SC等との調整の下で校内委員会が運営されるようになってきた	特別支援校内委員会を毎週開催し、障がいのある生徒の実態把握、学校生活支援シート、個別指導計画の立案・実施、効果検証を実施する。また、福祉や医療等の関係機関との連絡調整については、特別支援教育コーディネーターが中心となって行い、保護者に対する学校の窓口として機能させる。また、東京都及び狛江市の巡回相談を活用し、障がいの有無に関わらず支援が必要な生徒に対する指導等についての研鑽を深め、日々の指導に生かす。 ※特別支援教育は推進していると思いますが、もっと生徒の実態把握に努めてほしいと思います。※幼児期から社会性や学習面で順応しにくい児童、生徒が目立つようになった時代背景も気がかりですが、どの子にも生まれ持った生きる権利がある以上、特別支援教育の充実・推進を今後とも鋭意努力していただきたいと強く望みます。
			WEBQUアンケート結果を活用し、生徒の実態把握に努めるとともに、教育相談等を通して保護者との連携を図る。	4	教員	*	*	教員　100%（ー） 年２回の学年での検討会と専門家によるコンサルティングの効果が見える	WEBQUの結果等を活用し、スクールカウンセラーとの連携を図りながら、発達障がい等のある生徒もない生徒も生き生きと学ぶことができるユニバーサルデザインの考えに基づく指導と学級づくりを行う。また、家庭と子どもの支援員や学生ボランティア等を有効活用し、授業中や放課後の学習支援を進める。
			保健体育及び体育祭等を通して、体力や忍耐力を向上させ、生涯を通じて健康・安全で活力のある生活を送るための基礎を培う。	4	教員	3	生徒	生徒　89%（ー） 保護者　85%（ー） 教員　100%（ー） マスクをしながら運動を行う場面が少なくなかった。コロナ対策を講じながらの体力向上はとても難しかった	保健体育科においては、男女共習を基本として、コミュニケーションや協力・協働を重視しながら個に応じたきめ細かな指導を目指すとともに、体つくり運動、持久力の向上、体育理論、保健学習を充実させ、意図的・計画的に体力向上を図る。特に、運動する生徒とそうでない生徒の二極化の実態をふまえて意図的・計画的に「体つくり運動」の学習を展開し、体を動かす楽しさや心地よさを味わわせることで、主体的に運動に取り組む態度を養う。 ※ロードレース大会の意義が浸透しているので継続して実施してもらいたい。※体力はまだまだです。達成感を得てほしいです。
			保健指導及び食育の観点を踏まえた給食指導を充実させるとともに、食物アレルギーについての理解を深め事故の絶無に努める。	4	教員	*	*	教員　100%（ー） 食物アレルギー対応については校内での研究を実施して組織的な取組が実施されているが、食育への取組をより充実される必要がある	引き続き、保健指導及び食育の観点を踏まえた給食指導を充実させるとともに、食物アレルギーについての理解を深め、適時・適切な対応により事故の絶無を図る。

		健康教育として、生命・健康・安全・体力の重要さを体感させる。	防災・危機管理マニュアルや補助教材等を活用し実践的な避難訓練を実施する。	4	教員	4	生徒	生徒　91%（89.3%） 保護者　92%（91%） 教員　100%（94%）△ 年間計画に基づき実践的な防災教育が推進されている	「防災・危機管理マニュアル」及び各防災教育補助教材等を活用した実践的な避難訓練や家庭や地域、関係諸機関と連携したセーフティ教室を実施し、家庭・地域・関係諸機関と一体となり生徒の安全確保と健全育成に取り組む。 ※災害時に頼られる側になることを意識できるような訓練を企画してもらいたい　※防災意識が高まる体験ができるように引き続き協力していきます　※災害に対する意識と心構えを常に反復で学ぶことから、他者への思いやり、共助心も養われていくものでしょう。災害の怖さ、恐ろしさ、自助、共助の精神を失うことのないよう努めていただきたい教育の一環だと思います。　※コロナが落ち着いたら体育館や校舎に寝泊りする、炊き出しを行うなどのリアルな体験をさせてあげたい。　※意識は高いですが、もっと高めるためにはマンネリ化しない訓練や体験をさせることが必要だと感じます
			家庭や地域、関係諸機関と連携して、セーフティ教室や情報モラル教育を推進する。	4	教員	4	生徒	生徒　90%（－） 保護者　93%（－） 教員　93%（－） 6/4にセーフティ教室を実施することができた	SNSに関する取組については、生徒の実態や「SNS東京ルール」を踏まえて、「SNS四中ルール」を適時・適切に更新し、教職員・保護者・生徒・地域の連携の元、情報モラル教育の充実を図る。特に、ネットゲーム依存症や児童ポルノ防止法についての理解を深め、被害者だけでなく、加害者の立場にならないように指導を徹底する。また、タブレット端末の効果的な利用を通して、生徒たちに自分事として管理していくための約束事や使い方を考えさせながら、「善き社会の担い手」となるための知識・能力を育む。 ※特に情報モラルについては繰り返し指導する必要があるので、今後も継続してもらいたい。
			学年に応じた課題を設定し、調べ発表し合う学習を通して、東京オリンピック・パラリンピックに対する興味関心を高め、オリパラの躍神・スポーツ・文化・環境の４つのテーマについて横断的な学習を推進する。	4	教員	4・3	生徒・保護者	生徒　93%（－） 保護者　81%（－） 教員　100%（－） 聖火リレーの観覧やオリパラの観戦も中止となりとても残念であった。オリパラの講演会については予定通り実施することができた	オリンピック・パラリンピック教育については、下級生との信頼関係を築くことで、社会性や豊かな心、ボランティアマインド（四中2020レガシー）を育てる。 ※保護者へのアピール不足ではないか？
		道徳・人権教育を年間指導計画に基づき推進する。	「道徳の教科化」に関する指導内容や方法、評価等の研究を引き続き進め、「考え、議論する」道徳科を実践する。	3	教員	4	生徒	生徒　93%（78%）　△ 保護者　88%（86.7%） 教員　87%（89%）授業時数の確保はもとより内容や指導方法の工夫等により教科としての道徳が定着しつつある	道徳的な課題を生徒一人ひとりが自分自身の問題として捉えて、自己の生き方として考えを深めていくために、「考える道徳」「議論する道徳」の授業改善・充実に努める。また、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を整備するとともに、「道徳の単元化」「道徳のユニット化」を含めた実践的な全体計画及び年間計画を作成し、全教師の共通理解を図り、重点課題の解決に向けた効果的なカリキュラムを編成する。
		キャリア教育に基づく進路指導を実践する。	小中連携の視点をふまえながら、中学校３年間を見通した指導計画に基づき、キャリアパスポートを活用した継続的・計画的な指導を展開する。	3	教員	3	生徒	生徒　88%（69.7%）　△ 保護者　83%（55.3%）　△ 教員　94%（95%）、87%（－） 進路指導に比較的十分な時間をかけることができた	小学校との連携を図りながら、各学年の特性を踏まえ、年間指導計画・全体計画に基づく一貫した指導の下に、外部人材を効果的に活用し、適切な進路が選択できる力を育成する。その際、生徒が活動を記録し蓄積する「キャリア・パスポート」の活用を図る。 ※キャリアパスポートの活用は小学校でも課題である。進路学習について大きくポイント数が伸びた理由を検討し、他の教科や領域にも広げると良い。　※目標をもてるようになってほしいです。
			職場体験や上級学校訪問等を通して、キャリア教育の視点に立った職業観・勤労観を育み、生徒一人ひとりの進路希望に実現を図る。	4	教員	4	生徒	生徒　91%（－） 保護者　90%（－） 教員　94%（－）職場体験の代替として様々な職種の方をお呼びして直接仕事に関する話を聞く機会を持てたことはとても良かった	キャリア教育の視点に立った職業観や勤労観の育成を図るために、地域の人材を活用した職場訪問・職場体験等を通して、様々な社会で生きる人とのふれあいや職場での体験により、自己理解や将来の生き方について考えさせ、学んだ考えや意見をまとめ・発表させることで協働的な学びを推進する。 ※職場体験、訪問を例年お引き受けして常に思うことは、歴代四中生の礼儀正しさに好感を抱いてきました。普段は直接体験することのない社会体験学習から得ることは大きいことでしょう。今後の指導に期待しています。
保護者・地域との連携	地域に開かれた学校づくりに努め、地域の施設、人材を活用した教育活動に努める。	学校からの情報発信に努める。	学校だよりや学年だより、ホームページで学校情報を積極的に公開する。	4	教員	1・3	生徒・保護者	生徒　89.7%（81.8%）　△ 保護者　94.2%（88.6%）　△ 教員　100%（96.9%）保護者からは一定の評価を得ているのでより積極的な情報発信に努めていきたい	引き続き、各種便りや学校ホームページ等を通して積極的に情報発信することで社会に開かれた学校づくりを推進する。 ※紙のお便りは確実に保護者の手元に届かないことがある。後から探しても見返すのが難しい。家でしか見られない紙資源を使う等の理由からマチコミ配信にしてほしい。
			学校公開・授業参観・保護者会の持ち方を工夫し参加率を高める。	4	教員	4	保護者	保護者　93%（－） 教員　90%（－） コロナ禍により学校を公開することができなった	コロナが終息した折には、学校行事や学校公開、保護者会、地域と協働した行事を通して、保護者や地域との連携を深め、地域の人的・物的資源を活用した教育活動へと発展させていく。
			保護者・地域に対して体育祭・文化発表会・合唱コンクールなどの学校行事への参観を促す。	4	教員	4	保護者	保護者　95%（－） 教員　93%（－）体育祭については学年毎に観戦してもらったが合唱祭は生徒のみとして後日動画を配信した	
			ＰＴＡ活動や地域行事等に積極的に参加する。	＊	教員	＊	保護者		
		地域を活用した学習を進める。	職場体験や「四中スペシャル」等の地域人材を活用する取組を推進する。	4	教員	3	生徒	生徒　88%（－） 保護者　89%（－） 教員　100%（－） 3/4（土）保護者の参観は見送ったが１５の講座を開設し実施することができた	地域の諸活動への参加・実施を促し、地域の人々との交流を積極的に図り（「四中スペシャル」等）、人と人との触れ合いの大切さを学ばせ、併せて目上の人を敬う心を育む。また、「四中ゾーン学校運営協議会（仮称）」を導入し、これまで以上に保護者・地域との意図的・計画的・継続的な連携を進めていくことで、「小中9年間をつなげる教育」の実現を目指す。 ※地域と繋がることができる機会をこれからも増やしてほしい。 ※地域交流の良い事業ですので、ぜひ継続をお願いします。
誇れる四中生の育成		生徒一人ひとりを活かす教育活動を行う。	生徒一人ひとりに自己有用感や成就感、連帯感等を実感させる教育活動を工夫する。	4	教員	4・4	生徒・保護者	生徒　91%（86%）　△ 保護者　93%（86.7%）△ 教員　100%（94%）　△ 本校の教育活動に対する総論としての評価ととらえたい	新型コロナウイルス感染症対策のために健康観察や消毒作業等、学校の業務が純増している現状をふまえ、教職員にとっての「やりがい」と「多忙感」、「負担感」等を共有しながら、引き続き、子どもたちの健やかな学びを止めないことを前提にして、四中として大切にしてきた教育活動をよりよい形で実施していく。 ※中学生が充実した学校生活を送ることができるよう今後もお願いしたい　※もっと誇れる四中になってほしいと思います　※数値から四中への充実感が伺え、大変うれしく思います。さらに生徒、保護者、そして教職員、地域全体が誇れる学校づくりに努力していただきたいと強く希望いたします　※学校生活が充実している、学校が楽しいと感じられることは、学力だけでなく人間形成においてもとても重要なことで、心身の健康にも直結することなので、これからも重要視していただければと思います。 ※四中スピリッツを残していただきたい。